

44 野口英世の左手の「わが国初の有茎皮弁移植術」

志村俊郎¹⁾・唐沢信安²⁾・殿崎正明³⁾
岩崎⁴⁾一・寺本⁵⁾明

1) 日本医科大学教育推進室・2) 唐沢医院 (日本医科大学)
3) 日本医科大学図書館・4) 岩崎医院 (日本医科大学)
5) 日本医科大学脳神経外科

はじめに

野口英世が幼児期に重篤な熱傷を負い、その後二回の手術を受けたことは、広く知られている。その手術に関する報告は、「野口英世の手」に関する手の外科的一考察と題する野口の火傷時の状況から当時に行われた手術や野口の手がその後の人生に及ぼした影響や後世に伝えるものまでのテーマで平瀬雄一教授の詳細な研究論文に掲載されている。平瀬の報告では、手術は、指間を切り開き、副木をあてただけのものであり、「植皮あるいは皮弁による被覆は行っていない」と述べている。野口が、済生学舎入学後、医術開業後期試験の実技試験のため、

三回目の手術を受けていた事実は、野口英世書簡集Ⅳが世にでるまで全く知られていなかった。著者らは、二十年以上の野口英世の医学史研究者である唐沢信安医師の指導および本学整形外科出身池谷正之院長と癌研有明病院形成外科沢泉雅之院長のご協力により平成十八年五月に出版された野口英世の書簡集の野口の三度目の左手の手術記録と児島忠雄教授の手の皮弁の歴史から本邦初と思われる野口が受けた有茎皮弁移植術を医史学の見地より報告する。

野口の左手の手術の経緯…一回目の手術は、九歳の時、地元の斉藤幸元医師による開指術を受けた。二回目の手術は、十六歳の時、会陽医院の渡部鼎医師により開指手術が行われた。三回目の手術は、明治三十年八月二十日に東京帝国大学近藤次繁助教授により、当時学生用の無料患者である施療患者として、血脇守之助東京歯科医学学校長の力添えで行われた。野口は、三回目の手術の成功により、臨床試験の打診法も無事出来、医術開業後期試験の明治三十年十月の筆記試験と十一月の臨床試験に合格し、医師の資格を得た。この間の野口は、二ヶ月余りの入院加療を要した。

三回目の手術の概略…この時の手術の様子は、野口清作 (東京市本郷区医科大学第一医院外科二ノ側五号室)

より小林栄（岩代国那麻郡猪苗代町古城）にあてた、明治三十年八月二十三日と三十一日付けの書簡に入院までのいきさつと友人よりの野口の手術の有様として以下の如く記されている。

八月二十三日の野口の手紙抜粋

「小生ハ、去十七日近藤医学士（助教）ノ周旋ニヨリテ、大学ノ外科部施療患者トナリテ、同氏ノ手術ヲ受ケル為ニ入院仕候。手術ハ二十日ニ遂ゲラレ目下ハ旧床上ニ平伏罷在候。」

八月三十一日の野口の手紙抜粋

「手術概略

（一）掌面癩痕ヲ切断シテ伸展シ

（二）拇指内側面ノ癩痕ヲ切断シテ伸展シ、手掌面ノ創面ニ前膊半側ノ屈面ヨリ長サ十二、三センチメートル、幅四センチメートル程ノ皮弁ヲ造リ（経ハ腕節前面ニアリ）牽展シテ手掌面尺骨側ヨリ第三指程迄ノ創ニ縫接シ、撓骨側掌面ハハ手指ヨリ天保銭大ノ皮弁ヲ造リ（経ハ第一第二指間程ノ部）ヲ被覆セリ、且縫合セリ。

以上ノ皮弁採取痕ニハ大腿ヨリ、サール氏植皮ヲナセリ。考フルニ、本日ハ拇指及ビ掌面ノ癩痕ヲ切断シテ伸展シ得ル程度迄ニナシ置キ其創面ハ整形手術ヲナシ置キ、数日經過後、副木ヲ以テ伸展固定スルナラン。指節

ノ手術ハ又後日ニ譲ルモノナラント考フ。手術間ハ一時間ニ涉リ、其間近藤氏ハプルス（脈ナラン）ヲ頻ニ注意シ居レリ、

折角保養シ給へ、委細ハ後刻ニ譲ル、臨床講義聞ク為メ会話ヲ得ズ失敬ス、

時 正午過キ

在花

是ハ一友人ノ小生手術ノ有様ヲ記シタルモノニ御座候、当時小生ハ夢中ニテ、御座候得バ、且当日友人ハ数人立会居リ申候。」

これら野口の三回目の手術を裏付ける傍証…野口英世の東京帝国大学病院の入院に関しては、近藤次繁先生の誕百年記念会誌の明治三二年度近藤外科入院患者一覽表の中で火傷一〇例と記載されていた。

まとめ

本報告は、日本医科大学の源流である済生学舎に学んでいた当時の野口英世の左手の有茎皮弁移植術に關しての本邦初の医史学研究である。

本研究の手の皮弁手術の實際に關しては、本学整形外科池谷正之院長と癌研有明病院形成外科沢泉雅之医長のご助言を頂きました。ここに深謝申し上げます。